



安仁屋さん!
あ に や
チェンジ!

安仁屋さんのクリスマス

2020

バイトの無い日曜日。
世間は年の瀬。

：とは言え師走の喧騒は
例年にくらべ幾分控えめに見える。

今年も色々——
ありすぎるほど色々ありました。

それでも
クリスマスと年越しの準備に
それなりに忙しい街を尻目に
どちらにも無関係な
買い物も済ませて
お隣さん宅へ。



ピンポン。
コンコン。

…と、スマホにLINEが。

『あいてるからどぞ』

相変わらず不用心だなあ…

「お邪魔しまーす」

203

安仁屋





「おっすーもぐもぐ」

「……んばんは。
食事中でしたか」

「業のスーパーの
冷凍ピザ。
うめえんだぞー
もぐもぐ」

安仁屋杏子さん。

アパートの隣室に住んでる
社会人コスプレイヤー。
色々あってお知り合いに。

髪が伸びました。



「これ頼まれてた買い物です
巣籠もり用物資」

「おいすーサンキュー助かる。
ごはん食べてく？
冷凍ピザでいいなら」

「いいんですか？
俺が備蓄食料食べちゃって」

「何を大袈裟な。
待ってなトースターで
焼いてあげる。
ビールも飲もうぜー」



「それにしても」

「もぐもぐ…ん？
やっぱりビールとピザは
やべえかな？」

「そっちじやなくて
…伸びましたねえ、髪」

「まあねえ…今年は色々あって。
いや、逆だ。色々なかったからだ」



「短くしてたのって
コスプレの為ですよね？
キャラの選択肢が
広がるからとか」

「まあ主にそれだねえ。
でも今年は…もぐもぐ」

「はい」



「ぶっく〜。コミケも中止でな〜！
他のイベや撮影会も中止が続いて」

「夏頃から徐々に戻ってますけどな」

「もぐもぐ…。まあねえ。
で会社もリモートだし、
遊びの外出も自粛して、
ついでに美容室サボってた」

「伸びたと
〜」



「で、タタのロング、自分でも
わりと気に入っちゃってなー」

「似合ってますよ。
なんというか、大人っぽくて」

「だって大人だもんよ。
私をなんだと思って…
うおっチーズたれた！
ティッシュとって！」

大人が畳に垂らしたチーズを
綺麗に処理。



「ズチヤウさまでした」

「ズチ。でねー、
ヤロヤロヤロウかなって
思ってたお髪」

「なんだかもったいないですね」

「長いと面倒でさー。
お手入れとかさー。
散髪めんどくさかった結果
よけいに面倒になる
っていうさあー」

ただ長いだけでも
大変なんだな…



「キシはどっちが好きだい？
ショートオアロング」

「む、難しいですな…。
どっちも、としか…」

「どっちもは駄目」

「ぐぬ…」



「ほらどっちだー？
シヤラララン」

セルフ効果音と共に
鼻先で黒髪をファサと舞わせて
甘い香りを振り撒く安仁屋さん。

「う…でもやっぱり
どちらも、ですかね」

「どっちもは駄目だってば。
んふふ」





「わあ」

「イチャコラすんな
オラアアア!!!」



「見られて困るなら鍵かけろ!!
人目も憚らず
グチヨグチヨしやがって!」

「ギョギョ!?
勝手に入って来て何言っ…」



栗原やよぎさん。

安仁屋さんの友人で
コスパレシヨップの副店長。

怒っている。

「そよざん、荒れてますね…!」

「今年はお店も大変だったからね。
最近ずっとこんな感じ」
「あー…」

「きこえてっぞオラ!」

「ギウだよ! こちとら火の車だよ!
バカヤロー共!」



「オラ！サンタ服！
いつものこの時期なら
素人さんにもぎょこ売れる
稼げ頭だ！買え！
買い支えろバカヤロー！」

「押し売りじゃないか！」

「買うまでここを
テコでも動かねえからな！」

大変だったんだろうな今年……



「買ってあげましょうか
安仁屋さん」

「きうね…いつも色々
きよぎに貰ってるからね…」

「よし！んご置いとくから！！
今週中に振り込んどけよな！！
じゃあ私は次があるから！！
さよなら人間ども！！」



商談成立と共に疾風の如く
消え去ったやよぎさん。
ほどなく原付バイクの
けたたましいエンジン音が
冬の空に消えていく。

「次」って言ってましたが」

「…行商中なんだろうね…
ポーナス入ったら散財覚悟で
コス買いまくってやろう…」



「それはそれとして！
せっかくだし着てみるかサントー！」

「それはそれとしてー！」

「未着用のコスは
とりおえず着なくなるのさ」

業かな…？

「じゃちよっと変身タイムで」



宍仁屋さん、紙袋をぶら下げて
台所へ。

「さてどんなサンタかな？
…お？これは…！」

「う？
どうしました？」





「ふっうにかわいい!」
「ほんとだ!」

「そよぎの事だから
ドエロサントだと
思った!意外だ!
…何のキャラかな?」

「あーえっと確か
見覚えが…そうだ。
ほむ〇ですよ、まど〇の。
何かのゲームでコラボ
した時の…だった気が」

「ほんと良く知ってるなキシシ！
ヤウいう事は！
でもへー。ほむほ〇かー。
かーやいいなコレ」



「何枚か撮影しときますか？記念に」

「だんだんわかって来たなキミも。
勿論だ、撮りたまえよ」

極く自然な流れでミニ撮影会突入。

「うふふ。かわいい系も
やれるという事も
証明しておかないとな」



「黒髪ロングっ娘を
自前の髪でやれるのは
ちよっと快感だな…。
しやうらーん♪ふふふ。
どお？」

「いって思ってます」

「きゃっかきゃっかー。
しやうらーん♪」



「えへへ、かわいいけど
足とか肩とか
何気にえっちなゆえ♪」

上機嫌で
ポーズを決める
安仁屋さん。

最近イベント参加自粛中で
寂しきうだったから
元気になってよかった。



「はあー!」

突然大きなため息をつく
安仁屋さん。

「ど、どうしました? 疲れました?」

「ギョウじゃなくて。

いつもこうなるなーって
我ながらね」

「どういふことですか?」





「セックスしたい」

「おっとお…」

ムラ

ムラ

「まあ…かわいいエッチな
サンタになって漲るのは
当然だなも」
「だなも…」



「どーん！」

あっ
デジャブ感ある
展開！

「キミだっでさー
こんなにしてさー」

「あう」

流れるような所作で
露わにされたチンポに
息を吹きかける安仁屋さん。

「あう、見事ながちがち具合。
ぞりっぱー。ふーふー」



「この部屋の空気が
ピンク色だったの
気付いてたでしょ？
ズルいな私にばかり
言わせて」

「まあこうなるかなと…」
「期待してたんだ。
だからこんなになっ
たんだなも」

語尾

ため〇ちブーム
来てるな…



「れろれろれろ」

「や、そんな裏ばかり……うう」
「んー、このスジのところが
どうすれば気持ちいい？
こうかな……ぐりぐり」

舌の先端をを硬くして
スジを集中的に
グリーグリーする安仁屋さん。



「あ、安仁屋さん、そろそろ…」
「え！もう出ちゃう？」

「逆に出ようで出せない
微妙な責めが限界で」
「きゃー。んじゃあ
がっつりしよっか」





「んあ…ぱくっ」

「ふう…」

ねっとり温かい粘膜に
包まれながら、
舌と唇で先端を弄ばれる。

「ん…ひよっふあい。んふ。
ちゆる、ゆる…」

「ん、ちゅぽっ。
あ、髪気になる？
くすぐったい？」

「いえ、やっぱり
ウィッグとは違うかと。
サラサラつやつやで」

「ずっと短かったから
知らなかっただろう。
実は髪質がご自慢の
私さ」



「お、髪触られるの嫌なら
やめますけど」

「んー？なんえ？
ひもひいーお、キミに触られるの」

「じゃお失礼して…」

「んふん♪…ん、ちゅぽ」



「んー…、ちゅぽんっ
ふふ、ネトネトー。じゅるる」

唾液まみれになった竿全体に
唇を這わせながら吸い上げる。

「あ、安仁屋さん
そろそろ」

「ん？れきう？いーよ。
れんぶ飲まへて…はむ」





「う…」

「うひーお、うまへ？
んむ、んちゅぼっちゅぼっ」

「あ、出ま…す」

「うん、んっんっんっー」



「…あー」

「んっ、んー」

脈動開始と同時に
安仁屋さんが頬をすぼめて
射精に合わせて吸引する。

「ん、ん…ちゅぽっ
ん…ん…ぐ、ぐくっ」



「ん…んむっえふっけふっ！」
「あ、だ、大丈夫ですか！」

「あーいや、濃いのを
喉奥で受け、げふっ！
そこのウーロンくらい…
えふえふ」

手渡した烏龍茶で
喉に絡んだ精液を一気に
飲み流す安仁屋さん。

「ふー油断してた！
キミもおんまり濃いのは
控えたまえよー」

「な、なんか
すみません」

わかんないけど
謝っておいた。





「んっ…まあ
これだけ濃いなら
まだまだ出せる、
ならばよし！」

わかんないけど
ゆ、許された…

「あ、ほう
もう復活してる。
んじゃ二発目
いこっか？」

「あ…は♡はいっ…たよ？」

安仁屋さんが
ゆっくり腰を下ろして
根元まで飲み込む。

「ん…暖房入れてても
ちよっと寒いんですね」

「すぐ暖かくなんよー♪
ふふ…ん♡」



「きゃ？まあウィッグじゃ
ナマ髪の絶妙な香りは
なかなか出ないよね」

「ナマガミなんて言葉
初めて聞きました」

「私も今初めてやった。
おはは♪
ん、おは、あ、あ♡」



「あ、あ〜！ふ、ふう…ね、
キミも下から突いて？
動き合わせて…ね？」

「はい、じゃあ…」

安仁屋さんのリズムに合わせて
腰を跳ね上げる。





「あー、やっ、あ、あっ、あっ、あっ、
あ、あ♡ふ、あ♡ふふ♪
いき、ぴっ、たりだよあん♡」

互いの腰が上下から
均等なリズムでぶつかり
音をたてる。

「ふん、ふっ、ふ、すこし、
はやくするよ？いい？」

「はあはあ、はい」

「あーおおっおおっおおっ！
す、ズ♡あーあーあーあー！」

リズムを同調させたまま
速度を上げる。

黒髪が小刻みに揺れて、
汗と整髪料の混ざった
湿った匂いが室内を満たす。

「はあっ！あーあっ！あー！」





「あっあっあっあっあっあっ
いく、いくう、うーあー
やあっあっあっあっあー」

「はあっはあっ」

「あっあっ、いっ、いっ、くよう？
どうしよ、いっちやう！
あっあっあー！」



「い、あああああ
あああああ——！」

「.....」



「……っ！はあっ！
はあ、はあっはあ！」

「ぐ……う！」

安仁屋さんが身体を硬直させて
一瞬震えるのと同時に腔内に
射精する。

ゆっくり倒れ込んで来る
安仁屋さんの髪が、
カーテンのように顔を覆う。

「やーあったまったねー。
わしゃわしゃわしゃ」

「シャンプーも長いと
大変ですか？やっぱり」

「短い時よりはねー。
切っちゃおうかな？バサッと。
どう思う？」



「長いのも素敵ですけど
短い髪も好きですし…お任せで」

「そっかーじゃ切っちゃおうかねえ。
…でもその前にやりたい事がある
んだよねえ…ふっふっふ」

「？」

「おっとその前にメガネがネ。
しっかり見たいから」





「準備完了！
これでしっかり
目に焼き付けるぜ！」

「な、なにを...？」

「んふふふふう」

「はあ、
安仁屋さん？」

「いゆるアしだ。
髪コキって奴だよ
ふふ。どうだい？」

「な、なんかくすぐったくて
変な感じですが…
安仁屋さんは平気なんですか
髪の毛でそんな事」



「〜まああまり
気が進むモノじゃ無いけど
定番のエロシチュだから
体験しておこうと」

「貪欲ですね」

「お風呂ならすぐ洗えるし？
あやだシャンプー足してみるか」

竿に巻き付けた髪の上から
シャンプーを垂らして
ぬちゃぬちゃと扱く。



「お？いいかんじかな？
しちゃう？人生初髪コキ
で髪射しちゃう？ほれほれ」

「あ、うわー！」

ぬるぬるの髪の束が
シヤラシヤラ絡む
未知の感覚で、

「？あ、あり
駄目です、あ……」



「おおっ！出た出た！」

「うっ、おおおおお…っ！」

「あははっ♪
髪コキ&髪射童貞卒業
おめでたー！」



「んふふ、べったべた♡
どう？きもちよかった？
初髪コキ」

「はあ、はあ…へ、
変なかんじでした…」

「わたしもやう思う！
このプレイ変！ふふっ♪
おっと…流さなきや
ガビガビになるかも」



「せっかく得たエロスキルを
リセットするの勿体ないかな？
髪切るのやめよかな？どう？」

「なんで俺に聞くんですか…」



「キミは髪を使った
変態プレイを他にも
沢山知ってやうだし？」

「し、知らないですよ!？」

「ほんとかなあ…?おはは♡」





203
安仁屋

























































































































